

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文は、生徒の現状に合致した性教育の学習環境デザインを検討・実施し、探索的に洗練させていくことで、性教育充実への一助となることを目的とし、4つの高等学校での5つの性教育実践に基づいた知見を集積したものである。これまでわが国では、性教育に関する制度的側面が整えられ、教育現場での適切な性に関する指導が期待されてきたが、教育現場は「時間が確保できない」、「指導法がわからない」といった課題を抱えてきた。また、学習者である生徒は、性に関する必ずしも科学的ではなく、かつ促進的な情報を、雑誌やネットなどのメディアや、身近な友人・先輩から得ていることが明らかになっており、子供達が安全な性を生きるためには、学校での科学的で促進的な性教育が必要であるといえる。本論文では、性教育の実質化（内容面での捉え直し）と、学習環境デザインの必要性（方法面での捉え直し）が重要であるとし、生徒の現状に合致した「性教育の学習環境デザイン」に必要な要素を探索的に明らかにすることが目的とされている。この分野の研究は、現場教員の指導上の課題を解決し、同時に生徒らの生活の質を向上させるための重要なものであるが、その「取扱いにくさ」といった性質から、これまで積極的に行われてきたとは言い難い。したがって、上述のように性教育の内容と方法を見直し、実質化の基礎を築こうという本論文の目的には、研究的かつ実践的に大きな意義と独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文で用いた研究方法は2通りである。その第1の方法は、4つの高等学校で5つの性教育実践を行った上での、受講生徒への質問紙調査である。この方法では、授業実践を記述しながら、その学習環境デザインの効果としての生徒の反応を統計的に分析している。これらの質問紙調査では、量的研究だけではなく、生徒の自由記述を質的に検討し、分析を行っている。第2の方法は、4つの高等学校の学習環境デザインを、エスノグラフィックな視点から比較・検討する質的分析である。いずれの方法も教育心理学の領域においては適切な研究方法であり、また本研究のように授業実践家自らが自身の実践を対象とした研究する上での妥当性が高い。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

第6章では、本研究の主軸となる4つの高等学校のエスノグラフィーを詳細に記述しており、本実践研究の社会文化的背景が明確に示されている。また、性教育実践の際に行った質問紙調査の倫理的配慮について明確に説明されている。調査協力と授業の成績評価には一切関係がないことや、調査協力は任意のものであり、協力しないことによる不利益がないこと、回答したくない場合には白紙で提出してよいことを説明した上で実施しており、質問紙調査は適切に行われたと考えられる。性教育の実践前後に行われた質問紙調査によって得られた回答については、目的に応じて適切な解析（記述統計・対応のある平均値の差の検定・ $\chi^2$ 検定）が行われている。授業後の回答について質的分析を行う際には、KJ法が用いられている。以上のように、研究資料やデータの収集と分析に関して、質的及び量的な手法を駆使し、対象生徒の文化的背景が読み手にわかりやすくまとめられ、また回答内容が客観的に記述、分析されている。各手法は学術的に適切に使用されており、また教育実践の記録として倫理的な配慮に基づいた上で、

教育実践家にとっても理解、検討しやすい資料性を持っていると判断した。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文は、3部から構成されており、第Ⅰ部・序論（第1章～第5章）は問題と目的、第Ⅱ部・本論（第6章～第11章）は高等学校での性教育実践研究、第Ⅲ部・結論（第12章）は今後の性教育のあり方への具体的提言を含む総合的考察である。第Ⅰ部で述べられた理論的根拠をもとに、第Ⅱ部では性教育の実践研究が行われ、第Ⅲ部では、それらの結果から現場教員に還元可能な授業ガイドラインをまとめている。本論文では、①性別による文化的経験差、②学校風土の文化差、③自己関与性への配慮および拡張、の3点を考慮した性教育の授業実践の必要性が、学術的な水準を備えた客観的なデータに基づき、考察され、結論付けられていると判断された。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文では、生徒の現状に合致した性教育の学習環境デザインのために以下の3点が重要であると主張し、その知見に基づく今後の性教育のあり方についての提言がなされていた。1点目は、性別に起因する「性の経験差」を考慮した性教育の学習環境デザインが必要であること、2点目は、生徒の性に関連する「学校風土の文化差」を考慮に入れた性教育の学習環境デザインが必要であること、3点目は、性教育に特有の自己関与の高さを考慮・活用した学習環境デザインが必要であること、であった。人間の生・性は、生まれ持った生得的な側面よりも、学習や経験に基づく後天的な側面が大きく、そうした前提に基づく学校における性教育の実施が、生徒の意識や行動を変え得る学習へと繋がっていくことが具体的に示されていた。また生徒の社会的な階層や性別といった運命的とみなされるような属性も、生徒自身の自己決定により変えられることを学習する学習環境のデザインによって、生徒の生・性に関する健康と安全が保証されるという研究的、実践的主張も重要であると判断された。本論文は、生徒の現状に合致した性教育の授業デザインを客観的に記述、分析することで、現場教員の実践の一助となり、また生徒の生活の質を向上させ得るという意義を備えており、学校教育がなし得る可能性を教育科学の観点から示すという成果として認められた。

以上のことより、審査委員会では全員一致で、本論文が博士（教育学）の学位にふさわしいものであると判断した。